

「地球環境問題と SDGs、SUSTAINABLE について考える」

鈴鹿大学・鈴鹿大学短期大学部
附属図書館長
細井 和彦

7 月下旬から日本列島は異常な熱気に覆われ、列島の東西各地で 39℃を超えるまさに「うだるような酷暑」が続いている。報道によれば、酷暑の影響は熱中症による死者数増加、夏野菜の価格高騰から電気消費量の逼迫にまでおよぶという。筆者はのどかな田園地域を通り抜けて通勤しているが、稲を見るたびに日本人の主食である水稲の出来映えを気にするようになった（唯一の完全自給農作物でもあるため）。

環境問題の主要な背景に、われわれ人類のエネルギー消費量が深く関わっていることは、すでに周知の事実である。ワットが蒸気機関を発明した 1769 年以降、自然エネルギーに頼っていた人類の生活環境が石炭エネルギーに中心の生活に変化した。いわゆる産業革命である。19 世紀末になると、発電機と内燃機関の発明により石油エネルギーが利用されるようになり、ほぼ現在のわれわれの生活様式が生み出された。工業化した大量生産、大量消費の時代が現在の地球温暖化をはじめとする地球環境問題の主犯と言える。

人類が地球環境を悪化させた証拠となるのが新たな地質年代としての「人新世」（人類の爪痕が残る時代）の提唱である。「国際学会の人新世作業部会が 2023 年 7 月 12 日に、『人新世』の証拠を示す国際標準模式地に、カナダの湖を選んだと発表した。1950 年ごろを境に急拡大した人間活動の痕跡が地層から読み取れるという」（時時刻刻）人間の活動、地球史揺るがす 「人新世」モデルにカナダの湖 「前例ない変貌の証拠」『朝日新聞』2023 年 7 月 23 日）。最初に、人新世の議論に火をつけたのはオゾン層破壊の研究で 1995 年にノーベル化学賞を受賞したパウル・クルツェン博士（1933–2021 年）である。

では、人新世はいついつ始まったのだろうか。「クルツェン博士が提唱したのは、化石燃料を大量に燃やすようになった産業革命が始まった 18 世紀末だ。しかし、西欧が中心で、世界同時に変化が起きたとは言えない。一方、20 世紀半ばには、人口増加やそれに伴う大量生産・大量消費などで、世界中で各種の指標が爆発的に増加し、『グレート・アクセラレーション（大加速）』が起きたと言われる。人新世は 1950 年を境に始まったとする考えが優勢となった。同時期に相次いだ核実験由来の放射性物質が世界中で見つかり、区分する有効な指標とされた」（同上、『朝日新聞』2023 年 7 月 23 日）。

1950 年からまだ 70 数年しか過ぎていないが、気候変動の数値は異常値を示している。その証拠がゲリラ豪雨の多発、体温を超える高温、南岸低気圧による平野での降雪量の増加などである。ブローデルは人類の人口の増減の根本的な原因を「気候変動」であると主張した。まさに現代人類社会は、「隕石の衝突」による気候変動によって恐竜などが絶滅したのと同じくらい大きな地質学的転換を、われわれ人類自身の手で引き起こしているのではないだろうか。そう主張するのが斎藤幸平、東京大学准教授（経済思想）なのである（人新世は「第六の大量絶滅」、乗り越えるカギは脱成長 斎藤幸平さん『朝日新聞』2023 年 7 月 12 日）。

しかしながら、筆者は地球環境への危機意識のプロセスから斉藤幸平氏の独自のマルクス解釈にたどり着いたわけではない。最初に手にした斉藤氏の著作は『人新世の「資本論」』（集英社新書・2020年）である。同書は2020年度新書大賞を受賞しているベストセラーである。題名の『資本論』に惹かれて購入し、一気に読み終えた。だから「人新世」の意味も最近まで意識していなかった。新しい地質学年代として「人新世」の検証が開始されていると知ったのは後日である。純粋に『資本論』の著者カール・マルクスの学理の方に興味があったのである。そしてマルクスの新しい評価を知りたいと思い読み進めた。すると、筆者が学生時代からイメージしていた共産主義への道とは異なるマルクス像が述べられており、晩年のマルクスが環境問題に興味を持ち、最新の科学分野の研究を熱心に読み、必死にメモを取っていた事実を知った。そして近代社会の持続可能性のための方策を追求していたのが真実だと明かされ、驚愕したのだった。

斉藤氏は「コモン」をキーワードにマルクス学説を解釈している。公共性を有する社会資源（水資源・エネルギー資源が代表格）を人類で共有しながら、誰もが自由にアクセス可能な「富」として社会で運営していくべきだというのである。人類はもともと、共有地を共同体で保有していたのだから、過去の経験則を用いればまったく不可能ではないだろう。たとえば、『水滸伝』には武松が峠越えをする際に、人を襲う白い大虎を素手で殴り殺す場面がある。人間が虎の生息域に進出するようになり虎と遭遇した結果、虎が害獣にされて狩猟の対象となり、とつくに絶滅してしまった。村落の共有地（コモンに相当）が管理されなくなり荒廃してしまい、人間と動物が鉢合わせすることが増えたからである（上田信『森と緑の中国史エコロジカル・ヒストリーの試み』岩波書店・1999年）。熊や猿や猪がわれわれの生活圏に入ってきて遭遇すると人が負傷して、あたかも悪いのはあっちだ的な報道がされる。害獣扱いである。だが、害獣として廃棄処分するのはもったいないし可哀想だとなると、ジビエとして処理し食肉する。鹿肉の食肉化の現場は斉藤氏も取材している（斉藤幸平『ほくはウーバーで捻挫し、山でシカと戦い、水俣で泣いた』KADOKAWA・2022年）。

ただその原因を考えてみると、石油エネルギーで社会が動くようになり、山村で人が山に入り柴刈りをしなくなって、里山が荒廃したのが一因ではないのだろうか。やはり人間の自己都合に起因すると言える。ところが、里山の復活に注目して金銭至上主義でないスローダウンした持続可能な経済活動に注目する動き、新しい活動が日本や世界の各地で実践されている（藻谷浩介『里山資本主義』角川新書・2013年・藻谷浩介監修『進化する里山資本主義』the japantimes 出版・2020年、田中信一郎『信州はエネルギーシフトする』築地書館・2018年）。ときには地域主体、ときには「よそ者」地域の特性を活かして地域住民が協力している。若者の参加が未来への希望になり、地域が若返って活気を取り戻している（真庭市、周防大島が好例）。

ただし、斉藤氏は『人新世の「資本論」』のなかで「SDGsは大衆のアヘンである」と述べ、資本主義の「利益追求」という欲望を含んだSDGsでは地球環境問題を解決するすべはないと言い切っている。同感である。筆者がSDGsの達成目標を一つ一つ読んだとき、説明できない違和感（不可解さに近い）を覚えた。ゴミの減量と分別収集を調べる機会があり、江戸時代が循環型社会だったことを知り、違和感の意味が理解できた。もともと日本社会は水田水稲耕作を中心にした農業（産業）社会だった。農林水産資源を無駄にすることなく、再利用するリサイクルの循環が江戸・大阪・京都の町（商品生産と消費）、村落（水稲・農産物）、山村（材木・炭・金属）、海村（海産物・塩）の4つのユニットが連結しながら産品を製造して、有機的に機能、連結していた。SDGsの達成目標には江戸時代の日本で達成していたものが含まれていたため違和感を覚えたのである。もっとも、筆者の違和感は、NHK歴史探偵「大江戸SDGs」（2021年9月15日放送）を観て解消したのであるが。番組は江戸の町を徹底調査して、何でも再利用してゴミが出ない驚きのシステムとして、江戸庶民の生活を描いていた。リサイクルだけでなく、アップサイクルまでしていた

ことを知り、後世の技術革新の萌芽を見たのである。

さて、数ヶ月前に、もう一冊斉藤氏の著作を読んだ。「ゼロからの『資本論』」(NHK 出版・2023 年)である。2021 年に NHK で放送された「カール・マルクス『資本論』」のテキストに加筆・修正して、書き下ろした章をくわえた新書である。前著「人新世」よりも正面から『資本論』を取り上げていて、新しい解釈を試みているため、内容は新書にしては少々難解である。わたしたちの身の回りにある商品はわたしたちの豊かにし富ませるはずの労働により生み出されながら、現実はわれわれから富を奪っている。だから商品が豊富になると、逆にわたしたちの生活は貧しくなる。そのような社会が資本主義社会であると『資本論』は述べている、と斉藤氏は解説している。

本書の冒頭で「核心部分」を説明している。それが「人間と自然との物質代謝」であると言う。「物質代謝」とは何か。それは生理学の用語で、「〈生体に取り込まれた物質が、多様な化学変化を経て、異なった物質となって体外に排出される過程〉」だと述べている。マルクスは物質代謝の考えを『資本論』に取り入れたので、物質代謝論を土台にして『資本論』を読み進めていく構成になっている。『資本論』第 2 巻・第 3 巻が未完成のままマルクスが没し、エンゲルスが草稿やノートを基にして刊行したのであるから、マルクスの思想がどのように変化していったのかを明らかにする鍵もマルクスの草稿やノートの読解にあるという。

共同体に着目し、構成員の「平等」と「持続可能性」が実現されていたのが共同体であるとマルクスが気がついた。だが、それは「唯物史観」からの離脱を迫る思考であり、マルクス自身は葛藤に見舞われたことだろう。

晩年のマルクスが環境問題に関心を持ち、社会の持続可能性を模索しながら平等を思考していた事実は、斉藤氏のドイッチャー賞受賞作に加筆した日本語版『大洪水の前に マルクスと惑星の物質代謝』(角川ソフィア文庫・令和 4 年)が原点になっていると考えてよいだろう。

今回は斉藤幸平氏の著作から地球環境問題を考察する土台の部分について考えてみた。専門外ではなるが、家庭ゴミの減量と循環を利用する有機野菜栽培や消費だけにたよらないスローな暮らしに興味を持つ筆者としては、この分野に引き続き関心をもっていきたい。本文中で用いた書籍であるが、学生諸君には長い夏季休暇中に、一冊でも手に取ってもらえればと思う。

(参考文献)

ぼくはウーバーで捻挫し、山でシカと闘い、水俣で泣いた / KADOKAWA/斎藤幸平
大洪水の前に マルクスと惑星の物質代謝 / KADOKAWA/斎藤幸平
人新世の「資本論」 / 集英社/斎藤幸平
ゼロからの『資本論』 / NHK 出版/斎藤幸平
進化する里山資本主義 / ジャパンタイムズ出版/藻谷浩介
里山資本主義 日本経済は「安心の原理」で動く / 角川書店/藻谷浩介



Library Information

後期授業開始日(10月2日)より、図書館の開館時間に変更となります。

【現状】9:00~18:20 ⇒ 【変更後】8:45~17:00

17時以降の自習室はE棟学生ホールを解放いたします。そちらをご利用ください。

みなさん、図書館に新聞があることはご存知でしょうか？
 今年度は、中日新聞、朝日新聞、日本経済新聞、読売新聞、毎日新聞、伊勢新聞、ジャパントाइムズの7種類を購入しています。
 「新聞」と聞くと、「難しい内容ばかり書いてある」、「記事が多すぎて何を読めばいいかわからない」と敬遠しがちですよ。しかし、新聞を読むことには多くのメリットがあります。

1. 世界中の重要な情報を一覧できる
2. 記事の内容の信頼度が高い
3. 文章を読むスピードの向上
4. 正しい日本語が身につく
5. 自分なりの意見が持てる

図書館では、図書館長を始め、図書委員の先生、図書館事務員で記事を選び、掲示しています。皆さんの「読む」きっかけになれば嬉しいです。



新聞記事を読んで、自分の気になる記事を図書館に掲載してみませんか？

「新聞を読むのが好き！」

「文章構成の練習がしたい！」

「伝えたい記事がある！」

一緒に新聞記事掲載を手伝ってくれる図書館ボランティアを募集しています。(頻度は2週間に1回程度です。)興味がある方は、お気軽に図書館事務員にお声がけ下さい！

新着図書を紹介



ハンチバック

市川沙央 / 文藝春秋
 第169回芥川賞受賞作品。

「本を読むたび背骨は曲がり肺を潰し喉に孔を穿ち歩いては頭をぶつけ、私の身体は生きるために壊れてきた。」

井沢積華の背骨は、右肺を押し潰すかたちで極度に湾曲している。

両親が遺したグループホームの十畳の自室から積華は、あらゆる言葉を送り出す――。



極楽征夷大將軍

垣根涼介 / 文藝春秋
 第169回直木三十五賞受賞作品。

やる気なし 使命感なし 執着なし
 なぜこんな人間が天下をとってしまったのか？ 混迷する時代に、尊氏のような意志を欠いた人間が、何度も失脚の

窮地に立たされながらも権力の頂点へと登り詰められたのはなぜか？

幕府の祖でありながら、謎に包まれた初代将軍・足利尊氏の秘密を解き明かす歴史群像劇。



「風のマジム」

原田マハ

こども教育学部教授 伊東 直人

問題です。

第1問 南大東島は何県でしょうか？

第2問 ラム酒の原料は何？

第1問目の正解は沖縄県。沖縄本島から東に約400kmのところにあるサンゴ礁でできた島が南大東島です。

第2問目の正解はサトウキビ。ラム酒はサトウキビからつくられているのです。

この南大東島はサトウキビの産地。サトウキビというと“ざわわ ざわわ♪”という歌が聞こえてきそうですね。抜けるような青空の下、海からの風に背の高いサトウキビがゆれている、そんな光景が浮かんできます。

今回おすすめする本は「風のマジム」。物語は沖縄県本島と南大東島を舞台に展開していきます。舞台である南大東島はいつも強い風が吹き、特産のサトウキビ畑がいつも「ざわわ ざわわ」と風に揺れているのです。派遣社員として働く28歳の女性「伊波まじむ」がこの小説の主人公。まじむは自分が何をすべきか悩みながら漠然と日々を送っていましたが、その運命を変えたのは社内起業の募集。南大東島の特産サトウキビからラム酒を作るという会社を起業していくというサクセスストーリー。といっても、この小説に吹く風はまじむにとって順風満帆というわけではありません。逆風、無風、突風の中を彼女は駆け抜け、ラム酒生産にたどり着いていきます。

風の酒、ラム酒づくりはまじむのサクセスストーリーだけではなく、沖縄の誇りといってもいいのではないのでしょうか。また、まじむは沖縄の言葉で“真心”。真心をもって突き進むことで道は開ける。そんな勇気をもらえる小説です。余談ですがこの小説は実話をもとに創られています。因みに「南大東島 ラム酒」と検索するとネット通販でちゃんとこの小説に登場する本物のラム酒を手に入れることができます。

「酒は頭（ちぶる）で飲むもんじゃない。心（ちむ）で飲むもんさー」

サトウキビと風の奏でる音を聞きながらこの小説と国産ラム酒を味わいたいものです。



「嫌われた監督-落合博満は中日をどう変えたのか」

鈴木忠平

国際地域学部助教 竹野 富之

文化人類学者、デイヴィット・ギルモアによれば、「男になるためには自らが消耗品であるという事実を受け入れなければならない」という。確かにウクライナでは多くの兵士の命が供給され、消耗されている。とすれば、戦争とは、男に対して消費される性であることを自覚させるための儀礼なのかと考えたくもなる。逆に平和な国（例えば、日本のような）においては、男は消耗品としての本領を發揮できないのかもしれない。では、平和な国に生きる男性は自らの「性」とどのように向き合うのか。それを知る手掛かりとして鈴木忠平の著書を紹介したい。鈴木は「男らしさ」と孤独との相関関係について落合博満（中日ドラゴンズ元監督）というフレームを通して描写している。彼は落合監督に見いだされつつも苦悩する選手たちや裏方の姿を丁寧に活写する。その中でも、「チームにとって自分は必要なのか・そうではないのか」と悩む小林正人元投手を取り上げた文章に強く惹きつけられる。小林元投手は一軍と二軍を行き来する、いわゆる「エレベーター選手」である。そうした不安定な立場から、毎年春になると彼は自分の居場所が失われまいかと憂鬱に襲われる。しかし、「相手はお前を嫌がっているのに前が逃げてどうする」という落合の一言で一皮むけ、自らの居場所をつかんだ。彼のように相手への恐怖心を抑え、自分の弱さに打ち勝つことこそ「男らしさ」の根源ではないかと思う。デイヴィットによれば、「男らしさとは常に必要なものとは限らない」という。だからこそ、男たちは命を賭して「男らしさ」を誇示しようと挑み続けるのであろう。それがどんなに孤独な道であったとしても。（参考文献）デイヴィット・ギルモア 1994『「男らしさ」の人類学』前田俊子（訳）春秋社

